薬物乱用・依存の世帯調査

分担研究者　福井　進　国立精神・神経センター精神保健研究所
薬物依存研究部部長
研究協力者　和田　清　同研究部室長
伊豫　雅臣　同研究部室長
浦田重治郎　国立精神・神経センター国府台病院
精神科医長

研究要旨　無作為に抽出した東京圏、大阪圏、九州圏の15歳以上の男女3,300人を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存に関する疫学調査」を施行した。有効回答者数(率)は2,415人（73.2%）であった。日常生活のあり方、喫煙・飲酒の状況、睡眠薬など合法的な依存性薬物の使用状況、海外生活と薬物乱用の関係、薬物乱用に関する意識調査、周囲で違法薬物を乱用している人の周知度、違法薬物の乱用に誘われた経験の有無、違法薬物の乱用経験の有無などが明らかになった。特に、前2回の調査で不明であった違法薬物の最近1年間の使用者率が、調査方法・内容をかえることにより明らかになった。それによると潜在的な大麻乱用者は予想以上に多いことを知った。わが国での実施が危ぶまれていた一般市民を対象とした薬物乱用・依存の疫学調査が可能であることが判明した。今年度の調査結果を参考にして、次年度に予定されている6,000人規模の全国的、本格的な調査研究は、わが国の薬物乱用・依存対策を考える上でのよき疫学的資料となると考える。

A．研究目的

薬物乱用・依存問題は、国際的に深刻な社会問題に発展しており、各国の政府はその対策に苦慮している。近年、欧州一部の国では大麻などの違法薬物の規制を緩和しようとする傾向さえみられる状況である。

わが国では、覚せい剤と有機溶剤が主要な乱用薬物として25年以上にわたり社会に大きな影響を与えている。最近は長期乱用の結果、覚せい剤、有機溶剤による後遺症候群の増加がみられる[7]。海外との交流が盛んになるにつれて大麻事犯検挙者は増加していたが、1993年は検挙者数は急増し、大麻乱用の流行が危惧される。コカイン乱用の兆候がみられるが、その実態はまだ明らかでない。そして睡眠薬の乱用問題が社会問題化してきた。

外国に比べてわが国の薬物乱用をめぐる状況は恵まれているとは言え、決して楽観出来る状況にはない。

わが国の薬物乱用・依存の状況を諸外国のようにしないために将来に備えた薬物乱用・依存対策を立てることが必要である。しかし、薬物乱用・依存の実態の把握なくして、その対策は立てることは難しい。

これまでは、薬物乱用の疫学的指標として警察庁、厚生省、法務省による薬物事犯検挙者の統計と精神科医療施設の実態調査が主に使われてきた。

しかし、薬物乱用・依存の傾向及び実態を明らかにするためには、学校、職場、一般市民など他面的な疫学的調査が大切である。

特に、米国では3万人を対象に国家規模の予算でhousehold survey が2年に1回実施されており、薬物乱用・依存の実態の把握と対策の大きな指標となっている。

わが国でも薬物乱用・依存の住民調査が長年にわたり望まれてきたが、われわれは厚生科学研究費にて、平成4年度は市川市民1,100

人を、平成5年度は東京圏、大阪圏の住民3,000人を対象に疫学調査[2,3]を実施した。

前2回の調査結果を参考にして、本年度は東京圏、大阪圏、九州圏の住民3,300人を対象に、薬物乱用・依存に関する疫学調査を実施した。調査方法、調査内容、調査結果の分析法を研究することにより、将来の本格的な全国調査に備えるとともに、わが国の薬物乱用・依存の実態と対策の指標となることを目的とする。

B．研究方法

企画は分担研究者の福井が担当し、調査の実施は社団法人「新情報センター」に委託した。

- ・地　域　東京圏（旧都庁を中心に50km圏）
  大阪圏（大阪駅を中心に40km圏）
  九州圏（福岡市の20km圏と北九州市の20km圏）
- ・対　象　各圏の満15歳以上の男女
  標本数各圏1,100人、計3,300人
- ・抽出方法　層化２段無作為抽出法
  （調査地点数＝219）
- ・調査方法　調査員による個別訪問留置法
- ・調査内容　前年度の調査結果を参考にして別表（末尾）の69からなる質問内容を設定
- ・調査期間　平成6年10月3日～10月31日
- ・調査機関　社団法人新情報センター

なお、資料の集計は新情報センターが行ない、解析は福井が行なった。

C．結果

1．回収結果

有効回収数（率）は2,415（73.2%）であった。この種の住民調査では予想を上回る回答率であると考える。

事故数（率）は885（26.8%）であった。その内訳は下表の通りである。

なお、調査期間中に調査対象住民より17件の電話による問合わせがあったが、いずれも調査会社の性質を確認する問合わせの質問であり、調査は特に問題なく順調に実施されたと言える。

表1　回答数（率）及び事故数（率）

調査対象数	3,300人
回答数（率）	2,415（73.2%）
事故数（率）	885（26.8%）
事故の内訳	
転　居	83（ 2.5%）
長期不在	72（ 2.2%）
一時不在	228（ 6.9%）
住居不明	15（ 0.5%）
拒　否	414（12.5%）
その他	73（ 2.2%）

2．調査結果

（１）回答者の性、年齢、学歴、職業別分類（表2,3）

総対象2,415人中、東京圏805人（73.2%）、大阪圏788人（71.6%）、北九州圏822人（74.7%）であり、北九州圏の回答率が最も高く、次いで東京圏、大阪圏の順であった。

結果は地域別ではなく、全体の結果を報告する。

性別は、男性1,148人（47.5%）、女性1,267人（52.5%）であり、女性が多かった。年齢、学歴、職業は以下に示す通りである。

学歴は、大学卒32.2%（男性35.9%、女性28.8%）　高校卒47.7%（男性42.1%、女性52.7%）　中学卒15.0%（男性17.4%、女性12.9%）　小学校卒1.8%（男性1.3%、女性2.2%）であった。

高校卒以上の学歴を有する人は79.9%で、高学歴化社会を示す結果であった。大学卒は20歳代、30歳代は50%前後と高く、年齢が高くなるにつれて低率であった。地域別では大学卒は東京圏、大阪圏、北九州圏の順に多く、高校卒はその逆であった。

なお、大学卒は旧制高等学校・短大、高校卒は旧制中学、中学卒は尋常高等小学校、小学校卒は尋常小学校を含むものである。

表2　対象の性、年令、学歴

性別＼年齢	総数（%）	男性（%）	女性（%）
	2415(100.0)	1148(100.0)	1267(100.0)
15～19歳	219(9.1)	114(9.9)	105(8.3)
20～29歳	416(17.2)	194(16.9)	222(17.5)
30～39歳	379(15.7)	162(14.1)	217(17.1)
40～49歳	478(19.8)	216(18.8)	262(20.7)
50～59歳	464(19.2)	231(20.1)	233(18.4)
60歳以上	459(19.0)	231(20.1)	228(18.0)
学歴			
小学卒	43(1.8)	15(1.3)	28(2.2)
中学卒	363(15.0)	200(17.4)	163(12.9)
高校卒	1151(47.7)	483(42.1)	668(52.7)
大学卒	777(32.2)	412(35.9)	365(28.8)
無回答	81(3.4)	38(3.3)	43(3.4)

表3-1 職業別分類（就業形態）

対象＼就業形態	総　数	男　性	女　性
	2415	47.5	52.5
自営業　（計）	345	62.9	37.1
自営業主	245	79.2	20.8
家族従業者	100	23.0	77.0
勤め人　（計）	1144	57.2	42.8
勤め人（民間会社）	768	71.1	28.9
勤め人（公務員）	100	70.0	30.0
勤め人（パート等）	276	13.8	86.2
学生　（計）	248	55.2	44.8
中学生	19	57.9	42.1
高校生	116	54.3	45.7
予備校生	11	90.9	9.1
専門学校・各種学校生	31	41.9	58.1
短大・大学・大学院生	71	56.3	43.7
主婦専業	424	0.2	99.8
無職	224	52.7	47.3
＊有　職　（計）	1489	58.5	41.5
＊無　職　（計）	896	28.6	71.4

表3-2 職業別分類（仕事内容）

対象 ＼ 仕事内容	総数	男性	女性
	2415	47.5	52.5
自営業　（計）	324	63.0	37.0
農林漁業	23	69.6	30.4
商店主	85	61.2	38.8
工場主	43	67.4	32.6
土木建設業主	50	78.0	22.0
医療関係事業主	13	38.5	61.5
サービス業事業主	74	52.7	47.3
その他の事業主	36	66.7	33.3
勤め人　（計）	1138	56.8	43.2
販売従事者	185	51.4	48.6
保安従事者	22	90.9	9.1
運輸従事者	50	98.0	2.0
通信従事者	6	50.0	50.0
サービス業従事者	77	24.7	75.3
技能職従事者	31	35.5	64.5
土木建築業従事者	52	98.1	1.9
工場労働者	131	67.9	32.1
その他の労務従事者	34	50.0	50.0
事務従事者	251	38.2	61.8
管理的職業	89	97.8	2.2
医療職従事者	52	9.6	90.4
その他専門・技能職従事者	120	72.5	27.5
その他	38	44.7	55.3

（２）日常生活に関する質問

1)健康状態はどうか（表4）

健康状態はよくないと回答した人は438人（18.1%）であり、男性16.6%、女性19.5%であった。男女とも年齢層が高くなるほど「よくない」と答える人は高率となり、50歳代22.4%、60歳代30.7%であった。

2)日常生活、活動に意欲がなくなることがあるか（表5）

「意欲がなくなることがある」と回答した人は748人（31.0%）であった。10歳代、20歳代の若年層に高い傾向を認めた。

3)毎日の仕事・学業でうまくいかないことがあるか（表6）

「仕事・学業でうまくいかない」と回答した人は897人（37.1%）であった。年齢層が低いほどその傾向を認めた。

4)日常の生活で不安を感じ、緊張したことがあるか（表7）

「日常生活で不安感、緊張感を感じる」と回答した人は1,029人(42.6%)であった。

5)寝つけなかったり、早朝目覚めて眠れないことがあるか（表8）

「眠れないことがある」と回答した人は827人（34.2%）であり、男性33.7%、女性34.7%と男女差はなかった。年齢層が高くなるほど不眠者は高率であり、60歳以上の男性41.6%、女性49.1%が不眠を訴えていた。

6)最近1年間に頭痛を経験したか（表9）

「最近1年間に、しばしば頭が痛くなったことがあるか」の質問に「経験あり」と答えた人は38.4%（男性27.4%、女性48.4%）であり、女性に多かった。年齢差は男女ともなく、10歳代、20歳代に多い傾向を認めた。

7)現在の生活に満足しているか（表10）

「現在の生活に不満である」と回答した人は443人（18.3%）であり、男性20.2%、女性16.7%であった。

表4 健康状態はいかがですか（%）

総対象数	良好である	概ね良好である	時々思わしくない	常時調子が悪い	無回答	良好(小計)	よくない(小計)
2415人 (100.0)	735 (30.4)	1235 (51.1)	380 (15.7)	58 (2.4)	7 (0.3)	1970 (81.6)	438 (18.1)

表5 日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか（%）

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある(小計)	ない(小計)
2415人 (100.0)	146 (6.0)	602 (24.9)	1311 (54.3)	351 (14.5)	5 (0.2)	748 (31.0)	1662 (68.8)

表6 毎日している仕事でうまくいかないことがありますか（%）

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある(小計)	ない(小計)
2415人 (100.0)	164 (6.8)	733 (30.4)	1309 (54.2)	199 (8.2)	10 (0.4)	897 (37.1)	1508 (62.4)

表7 日常の生活で不安を感じたり、緊張したことがありますか（%）

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある(小計)	ない(小計)
2415人 (100.0)	154 (6.4)	875 (36.2)	1149 (47.6)	227 (9.4)	10 (0.4)	1029 (42.6)	1376 (57.0)

表8 寝つけなかったり、朝早く目覚めて眠れないことがありますか（%）

総対象数	たびたびある	あ る	あまりない	まったくない	無回答	ある（小計）	ない（小計）
2415人 (100.0)	172 (7.1)	655 (27.1)	1097 (45.4)	484 (20.0)	7 (0.3)	827 (34.2)	1581 (65.5)

表9 あなたは、最近1年間に、しばしば頭が痛くなったことがありますか（%）

総対象数	経験ない	経験ある	無回答
2415人 (100.0)	1435 (59.4)	927 (38.4)	53 (2.2)

表10 現在の生活に満足していますか（%）

総対象数	満足している	まあ満足している	少し不満である	全く不満である	無回答	満 足（小計）	不 満（小計）
2415人 (100.0)	443 (18.3)	1520 (62.9)	390 (16.1)	53 (2.2)	9 (0.4)	1963 (81.3)	443 (18.3)

（3）嗜好品に関する質問

1)喫煙

a.喫煙と性、年齢の関係（表11）

喫煙率は、32.0%（男性51.1%、女性14.8%）であった。

男性の喫煙率は30歳代66.7%が最も高く、20歳代58.8%、40歳代55.6%、50歳代54.1%、60歳以上44.2%、20歳未満15.8%であった。女性は20歳代18.5%、30歳代18.4%、40歳代17.2%と高率であった。

10本以内／日7.5%、11～20本／日15.3%、21本以上／日9.1%であった。

男性は11～20本／日、21本以上／日の喫煙者が多いのに対し、女性は20本／日以下の喫煙者が多かった。

b.禁煙者と禁煙のこころみ（表12）

禁煙者（率）は、333人（13.8%）であり、男性は50歳代以上に多く、女性は20歳代、30歳代に比較的多く認めた。

なお、喫煙者774人に対し「健康その他の理由で禁煙をしようとしたことがあったか」の質問に対し、「禁煙を考えたが実行していない」40.3%、「禁煙を失敗した」23.6%と回答しており、喫煙者の63.9%が禁煙をしたいと考えていた。

c.喫煙開始年齢（表13）

喫煙者1,107人中、初めて喫煙をした時期は、小学校時代2.3%、中学校時代13.3%、中卒後20歳未満34.9%、20歳以後47.7%であり、過半数以上が未成年の時期に喫煙を始めている。男女とも未成年の喫煙者は47.4%が中学時代であった。また喫煙開始が「20歳を過ぎてから」が過半数を越えているのは、男性は40歳以上、女性は30歳以上の年齢層であり、最近の喫煙者の喫煙開始の低年齢化を示す結果である。

表11 喫煙と性、年齢の関係

	総数	1日に1～10本吸っている	1日に11～20本吸っている	1日に21本以上吸っている	おもにパイプたばこを吸っている	以前吸っていたが現在吸っていない	以前から吸ったことがない	無回答	吸っている（計）	吸っていない（計）
【総数】	2415	7.5	15.3	9.1	0.1	13.8	51.6	2.5	32.0	65.4
性別										
男性	1148	8.0	25.2	17.9	0.1	21.7	26.0	1.2	51.1	47.6
女性	1267	7.0	6.4	1.2	0.2	6.6	74.9	3.7	14.8	81.5
年齢										
15～19歳	219	4.6	6.8	0.9	-	5.0	79.5	3.2	12.3	84.5
20～29歳	416	11.3	19.2	6.7	-	9.6	51.0	2.2	37.3	60.6
30～39歳	379	8.7	17.9	12.1	0.3	14.0	44.6	2.4	39.1	58.6
40～49歳	478	6.1	16.1	12.1	0.2	12.1	52.3	1.0	34.5	64.4
50～59歳	464	6.0	14.7	11.9	-	16.6	49.8	1.1	32.5	66.4
60歳以上	459	7.4	13.5	6.8	0.2	20.5	46.0	5.7	27.9	66.4
（性・年齢別）										
男性 15～19歳	114	5.3	9.6	0.9	-	6.1	76.3	1.8	15.8	82.5
20～29歳	194	10.8	34.0	13.9	-	7.7	31.4	2.1	58.8	39.2
30～39歳	162	8.6	30.9	27.2	-	16.0	16.7	0.6	66.7	32.7
40～49歳	216	4.6	25.0	25.5	0.5	22.7	21.3	0.5	55.6	44.0
50～59歳	231	8.2	24.7	21.2	-	29.0	16.5	0.4	54.1	45.5
60歳以上	231	9.5	22.1	12.6	-	36.8	16.9	2.2	44.2	53.7
女性 15～19歳	105	3.8	3.8	1.0	-	3.8	82.9	4.8	8.6	86.7
20～29歳	222	11.7	6.3	0.5	-	11.3	68.0	2.3	18.5	79.3
30～39歳	217	8.8	8.3	0.9	0.5	12.4	65.4	3.7	18.4	77.9
40～49歳	262	7.3	8.8	1.1	-	3.4	77.9	1.5	17.2	81.3
50～59歳	233	3.9	4.7	2.6	-	4.3	82.8	1.7	11.2	87.1
60歳以上	228	5.3	4.8	0.9	0.4	3.9	75.4	9.2	11.4	79.4

表12 これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありますか（%）

該当数	禁煙を考えたことはない	禁煙を実行していない	禁煙を失敗した	その他	無回答
774人 (100.0)	246 (31.8)	312 (40.3)	183 (23.6)	24 (3.1)	9 (1.2)

表13 あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか（%）

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	20歳過ぎてから	無回答
1107人 (100.0)	25 (2.3)	147 (13.3)	386 (34.9)	528 (47.7)	21 (1.9)

2)飲酒

a.飲酒と性、年齢の関係（表14）

アルコールを飲むという人の率は71.6%（男性83.0%、女性61.2%）であった。

「殆ど毎日飲む人」は24.1%（男性41.5%、女性8.3%）であった。

「飲酒しない人」は26.6%（男性16.5%、女性35.8%）であった。

「殆ど毎日飲酒する人」は、男性は50歳代58.0%、40歳代55.6%、60歳代52.4%、30歳代48.1%と高率であり、女性は50歳代12.4%、40歳代11.5%の順であった。

男性は「週に2～3回」以上の習慣飲酒者が多く、女性は「月に1～2回」以下の機会的飲酒者が多い。

b.飲酒の機会（複数回答）（表15）

飲酒をする（現在禁酒中の人を含む）と回答した1,757人の飲酒の機会は「家での食事、団らんで飲む」61.1%、「友人・同僚・上司のつきあいで飲む」42.1%、「その他のつきあいで飲む」13.0%、「仕事、商売の必要で飲む」12.1%の順で多かった。

「家での飲酒」は男女とも30歳代以上で多く、男女差を認めなかった。それに対し、「友人・同僚・上司のつきあいでの飲酒」は男性は20歳未満、20歳代、30歳代に、女性は20歳未満、20歳代に多く、若年層に多い傾向を認めた。

「仕事、商売上の飲酒」は、男性の30歳代、40歳代、50歳代に多かった。

C.飲酒開始の年齢（表16）

飲酒者の1,757人中、初めてアルコールを飲んだ時期は、「小学校時代」7.6%、「中学校時代」8.2%、「中卒後20歳未満」34.9%、「20歳過ぎてから」47.8%であり、過半数以上が未成年の間に経験をしていた。

50歳以上の男性飲酒者と30歳以上の女性飲酒者の50%以上が成人になって初めて飲酒を経験したと回答していた。

3)喫煙と飲酒の関係

喫煙と飲酒は密接な関係が認められ、喫煙者は非喫煙者より飲酒率は高く、また喫煙本数が増えると飲酒率も高くなる傾向を認めた。特に「毎日の飲酒者」にその傾向が強かった。

喫煙者は、飲酒開始時期が20歳以後の人が39.8%に対し、非喫煙者は55.7%であり、喫煙が早期の飲酒開始時期と密接な関係があった。

表14 アルコール（酒、ビール、ウイスキー等）はお飲みになりますか（%）

総対象数	全く飲まない	年に10回以内飲む	月に1～2回飲む	週に 1回飲む	週に2～3回飲む	週に 4回回飲む
2415人 (100.0)	614 (25.4)	314 (13.0)	351 (14.5)	159 (6.6)	237 (9.8)	87 (3.6)

ほとんど毎日飲む	現在禁酒中	無回答	飲 む（計）	飲まない（計）
581 (24.1)	28 (1.2)	44 (1.8)	1729 (71.6)	642 (26.6)

表15 最近は主にどういう機会に飲むことが多いですか（複数回答）（%）

該当数	仕事や商売で必要	友人・上司関係	その他のつきあい	家で食事団らん時	寝るまえに飲む
1757人 (100.0)	213 (12.1)	740 (42.1)	229 (13.0)	1073 (61.1)	183 (10.4)

仕事等で不愉快時	家庭で不愉快時	その他	無回答	回答計
47 (2.7)	32 (1.8)	35 (2.0)	27 (1.5)	2579 (146.8)

表16 あなたが、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか（%）

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	２０歳過ぎてから	無回答
1757人 (100.0)	134 (7.6)	144 (8.2)	614 (34.9)	840 (47.8)	25 (1.4)

（４）医療用薬物の使用に関する質問

1)家庭に用意してある常備薬の種類（複数回答）（表17）

「常備薬を特に用意していない」と答えた人は10.6%であり、何等かの常備薬を家庭に用意している人が殆どであった。胃腸薬77.2%、風邪薬75.6%、湿布薬59.1%、鎮痛薬41.6%、ビタミン剤41.4%が多い常備薬であった。

表17 次の薬のうち、あなたのご家庭にいつも用意しているものすべてに○をつけてください（複数回答）（%）

総対象数	特に用意してない	風邪薬	胃腸薬	ビタミン剤	強精強肝薬	鎮痛薬	精神安定薬
2415人 (100.0)	256 (10.6)	1825 (75.6)	1864 (77.2)	999 (41.4)	49 (2.0)	1004 (41.6)	93 (3.9)

睡眠薬	抗生物質	湿布薬	その他	無回答	回答計	用意あり(計)
72 (3.0)	198 (8.2)	1427 (59.1)	139 (5.8)	23 (1.0)	7949 (329.2)	2136 (88.4)

表18 次の薬のうち、あなたが常用している薬がありますか（複数回答）（%）

総対象数	特にない	風邪薬	胃腸薬	ビタミン剤	強精強肝薬	鎮痛薬	精神安定薬
2415人 (100.0)	1387 (57.4)	74 (3.1)	333 (13.8)	375 (15.5)	21 (0.9)	73 (3.0)	40 (1.7)

睡眠薬	抗生物質	血圧の薬	その他	無回答	回答計	常用あり(計)
22 (0.9)	19 (0.8)	164 (6.8)	120 (5.0)	166 (6.9)	2794 (115.7)	862 (35.7)

2)常用している薬の種類（複数回答）（表18）

「常用薬は特にない」と答えた人は57.4%であり、「何等かの常用薬を使用している」と回答した人は35.7%であって、年齢が高いほど高率で50歳代49.1%、60歳以上58.8%であった。

常用薬は、ビタミン剤15.5%、胃腸薬13.8%、血圧の薬6.8%が比較的多く、風邪薬3.1%、鎮痛薬3.0%、精神安定薬1.7%、睡眠薬0.9%、強精強肝剤0.9%などであった。

胃腸薬、血圧の薬は男性に多く、ビタミン剤、鎮痛薬は女性に多い傾向を認めた。

3)最近1年間に鎮痛薬を使用した人（表19）

「最近1年間に頭痛、生理痛以外に慢性の身体的痛みのため鎮痛薬を使用した人」は349人(14.5%)で男性13.3%、女性15.5%であった。年齢別では男女とも50歳以上にやや高率であった。

週に数回以上の使用者（常用者）は2.2%に認めた。

入手先は病院48.1%、常備薬33.3%、薬局18.9%であった。

4)最近1年間に精神安定薬を使用した人（表19）

「最近1年間に精神安定薬（抗不安薬）を使用した人」は111人(4.6%)であり、男性4.2%、女性5.0%と女性にやや多い傾向を認めた。

「週に数回以上の使用者」は1.7%であり、常用者と考える。

男性は50歳以上は6.9～7.4%、女性は50歳以上は8.6～10.5%と高齢者に使用率が高い傾向を認めた。

精神安定薬の入手先は病院85.6%と医療機関が主であった。

精神安定薬を使用していた人は、日常生活において「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」と答えた人に有意（$p<0.0001$）に高率であった。

精神安定薬の使用者111人の使用理由は、不眠、不安、ストレス、高血圧など精神的・身体的疾患の改善であり、殆どが治療目的による使用であった。遊びの目的でと答えた人はいなかった。

5)最近1年間で睡眠薬を使用した人（表19）

「最近1年間に睡眠薬を使用した人」は95人(3.9%)で、「週に数回以上の使用者（常用者）」は1.2%であった。

睡眠薬の使用者は男性3.7%、女性4.1%と女性の使用率が高い傾向を認めた。

男性は50歳代6.1%、60歳以上8.2%、女性は50歳代6.9%、60歳以上の8.3%の高齢者に高い使用率を示していた。

睡眠薬の使用者は日常生活において「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」と答えた人に有意に高率を認めた。

睡眠薬の入手先（複数回答）は、病院81.1%、薬局3.2%、常備薬7.4%、友人・知人5.

表19 最近1年間に使用した医療用の向精神薬

薬物名	年に数回使用	月に数回使用	週に数回使用	日に3回使用	日に数回以上使用	使用者(小計)
鎮痛薬	231 (9.6)	66 (2.7)	21 (0.9)	29 (1.2)	2 (0.1)	349 (14.5)
精神安定薬	42 (1.7)	25 (1.0)	18 (0.7)	25 (1.0)	1 (0.04)	111 (4.6)
睡眠薬	43 (1.8)	24 (1.0)	11 (0.5)	※ 17 (0.7)	− −	95 (3.9)

注：※睡眠薬は日に1回

3%であった。常備薬、友人・知人の率が高いのが気になる結果である。

使用理由（複数回答）は「不眠の治療」76.8%であり、不安、ストレスなどの精神的苦痛、高血圧その他身体疾患など治療の目的が多かった。

（5）薬物乱用に関する意識調査

1)薬物乱用という言葉を知っているか（表20）

知っていると答えた人1,053人(43.6%)であった。

2)知っている乱用薬物の名前（複数回答）（表21）

大麻、麻薬、コカイン、覚せい剤、シンナーは90%前後の人が知っていると回答した。モルヒネ、ヘロインは80%前後、ヒロポンは62.9%が知っていた。トルエン45.0%、LSD 31.0%、有機溶剤19.5%、クラック18.1%が知っていたと回答した。

3)乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っているか（複数回答）（表22）

乱用薬物は依存を形成することを、2,189人（90.6%）が「よく知っている」「だいたいわかる」と回答した。

4)日本における薬物乱用の問題状況（表23）

「一般の人々に広がり危険な状況」は27.2%、「一般の人々に多少広がり始めている」は44.2%とわが国の薬物乱用状況を危険視していた。

5)「あへん戦争」について知っているか（表24）

あへん戦争について「内容をくわしく知っている」は8.4%、「内容を多少知っている」は34.9%で1,045人（43.3%）が知っており、一方、半数以上が「知らない」と回答した。

表20 薬物乱用という言葉を知っていますか（%）

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている（計）
2415人 (100.0)	147 (6.1)	906 (37.5)	1189 (49.2)	124 (5.1)	49 (2.0)	1053 (43.6)

表21 次の乱用薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつけてください（複数回答）（%）

総対象数	大麻	モルヒネ	ヘロイン	麻薬	コカイン	L.S.D	ヒロポン	覚せい剤
2415人 (100.0)	2176 (90.1)	1901 (78.7)	2037 (84.3)	2157 (89.3)	2108 (87.3)	748 (31.0)	1518 (62.9)	2166 (89.7)

トルエン	シンナー	有機溶剤	クラック	どれも知らない	無回答	回答計	知っている（計）
1087 (45.0)	2225 (92.1)	472 (19.5)	437 (18.1)	39 (1.6)	46 (1.9)	19117 (791.6)	2330 (96.5)

表22 乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか（%）

総対象数	よく知っている	だいたいわかる	知らない	無回答	知っている（計）
2415人 (100.0)	1045 (43.3)	1144 (47.4)	184 (7.6)	42 (1.7)	2189 (90.6)

表23 日本における薬物乱用の問題状況（%）

総対象数	一般人に危険状況	広がり始めている	まだ初期の段階	問題は全くない	わからない	無回答
2415人 (100.0)	657 (27.2)	1067 (44.2)	193 (8.0)	15 (0.6)	436 (18.1)	47 (1.9)

表24 「あへん戦争」について知っていますか（%）

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている（計）
2415人 (100.0)	202 (8.4)	843 (34.9)	1072 (44.4)	263 (10.9)	35 (1.4)	1045 (43.3)

6)米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っているか（表25）

米国・中南米の麻薬戦争を637人（26.4%）のみが知っていると回答した。

7)覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題だと思うか（表26）

「覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題である」と2,145人（88.8%）の人が認める回答をした。

8)「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくる事がある」と思うか（表27）

「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくることがある」と考えている人は304人（12.6%）のみで、薬物乱用は自分とはあまり関係がない問題と捉えている人が多かった。

9)「シンナー遊び」の一部未成年者間での流行の周知度（表28）

「シンナー遊び」が一部未成年者の間で流行していることを「知っている」と回答した人は2,254人（93.3%）で、殆どの人が認識していた。

10)覚せい剤が長年にわたり乱用されていることの周知度（表29）

「覚せい剤がわが国で乱用されている」ことを2,095人（86.7%）の人が認識していた。

11)家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがあるか（表30）

この質問に対し、「ほとんどない」と回答した人は1,472人（61.0%）であって、家庭内で薬物乱用問題が話題として語られる家庭が少ないことを示していた。

薬物乱用問題に関する認識度の質問について、「シンナー遊び」、「覚せい剤乱用」がわが国の主要な薬物乱用問題であって、一般の人に広がりつつある危険な状況にあることは認識しているが、自分とはあまり関係ない問題と考えている人が多かった。また歴史、外国の問題、概念などについての認識度は比較的低かった。

表25 米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか（%）

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている（計）
2415人 (100.0)	103 (4.3)	534 (22.1)	1043 (43.2)	692 (28.7)	43 (1.8)	637 (26.4)

表26 覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々にも関係のある問題だと思いますか（%）

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う（小計）	思わない（小計）
2415人 (100.0)	991 (41.0)	1154 (47.8)	198 (8.2)	30 (1.2)	42 (1.7)	2145 (88.8)	228 (9.4)

表27 「自分にも、薬物乱用への誘惑の手が伸びてくることがある」と思いますか（%）

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う（小計）	思わない（小計）
2415人 (100.0)	50 (2.1)	254 (10.5)	965 (40.0)	1104 (45.7)	42 (1.7)	304 (12.6)	2069 (85.7)

表28 「シンナー遊び」が一部の未成年者の間で流行していることを知っていますか（%）

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている（計）
2415人 (100.0)	1079 (44.7)	1175 (48.7)	130 (5.4)	31 (1.3)	2254 (93.3)

表29 覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていますか（%）

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている（計）
2415人 (100.0)	711 (29.4)	1384 (57.3)	281 (11.6)	39 (1.6)	2095 (86.7)

表30 家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがありますか（%）

総対象数	ほとんどない	話題になった	時々話す	無回答
2415人 (100.0)	1472 (61.0)	643 (26.6)	268 (11.1)	32 (1.3)

（6）海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

1)海外旅行、出張、留学をしたことのある人（複数回答）（表31）

海外に滞在したことのある人は、978人（40.5%）と回答した。その内訳は、旅行が904人（37.4%）と最も多く、海外出張147人（6.1%）、仕事で駐在26人（1.1%）、留学32人（1.3%）その他であった。

海外に出たことがない人は、1,400人（58.0%）であった。

2)海外滞在中に、薬物を使用した人を見聞きしたか（表32）

該当者978人中、「薬物の使用の噂を聞いたことのある人」80人（8.2%）、「薬物を使用した人を知っている人」46人（4.7%）であった。その中で、海外旅行者の比率は低く、仕事で滞在、海外留学など長期滞在者に比率は高かったが、人数的には海外旅行者が多い。

表31 あなたは、海外旅行、海外出張、海外留学をしたことがありますか（複数回答）（%）

総対象数	したことがない	海外旅行をした	海外出張をした	海外に仕事で駐在	海外留学をした	他理由で海外生活	回答計	海外滞在した(計)
2415人 (100.0)	1400 (58.0)	904 (37.4)	147 (6.1)	26 (1.1)	32 (1.3)	33 (1.4)	2579 (106.8)	978 (40.5)

表32 海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしましたか（%）

該当数	知らない	うわさを聞いた	知っている	無回答
978人 (100.0)	835 (85.4)	80 (8.2)	46 (4.7)	17 (1.7)

表33 海外滞在中に、あなたは薬物使用を誘われたことがありますか（%）

該当数	な い	あ る	なんとも言えない	無回答
978人 (100.0)	876 (89.6)	25 (2.6)	7 (0.7)	70 (7.2)

表34 海外滞在中にあなたが使用された薬物があれば教えて下さい（複数回答）（%）

該当数	使用したことなし	大 麻	コカイン	ヘロイン	その他	無回答	回答計	使用した(計)
978人 (100.0)	868 (88.8)	1 (0.1)	− −	− −	1 (0.1)	108 (11.0)	978 (100.0)	2 (0.2)

3)海外滞在中に、薬物使用を誘われたことがあるか（表33）

978人中、25人（2.6%）が誘われたことがあったと回答した。

4)海外滞在中に、使用した薬物は何か（表34）

978人中、2人（0.2%）が薬物を使用したと回答した。大麻が1人、その他1人であった。

（7）周囲で薬物乱用をしている人の周知度

（複数回答）（表35）

あなたの周囲で薬物を乱用している人を知っているか、そしてその薬物名はとの質問に対し、「知っている」と回答した人は256人（10.6%）であった。その人が使用している薬物名（複数回答）は、有機溶剤208人（8.6%）、覚せい剤42人（1.7%）、大麻24人（1.0%）、コカイン6人（0.2%）、ヘロイン5人（0.2%）、薬物名不明27人（1.1%）であった。

表35 あなたの周囲で、薬物を乱用している（乱用していた）人を知っていますか（%）
その薬物名も教えて下さい（複数回答）（%）

総対象数	1年内で知ってる	1年以上前に知る	なんとも言えない	無回答	知らない	知っている（計）
2415人 (100.0)	60 (2.5)	196 (8.1)	73 (3.0)	39 (1.6)	2047 (84.8)	256 (10.6)
有機溶剤	52 (2.2)	156 (6.5)	—	—	—	208 (8.6)
覚せい剤	8 (0.3)	34 (1.4)	—	—	—	42 (1.7)
大　麻	4 (0.16)	20 (0.8)	—	—	—	24 (1.0)
コカイン	2 (0.08)	4 (0.16)	—	—	—	6 (0.2)
ヘロイン	1 (0.04)	4 (0.16)	—	—	—	5 (0.2)
薬物名不明	7 (0.3)	20 (0.8)	—	—	—	27 (1.1)
無回答	1 (0.04)	1 (0.04)	—	—	—	2 (0.08)

注：乱用薬物の比率は総対象数（2,415人）を母数としたものである

なお、「1年以内に乱用した人を知っている」と回答した人は60人（2.5%）であった。最近の乱用の疑いがあると推察出来る人である。その内訳は、有機溶剤52人（2.2%）、覚せい剤8人（0.3%）、大麻4人（0.16%）、コカイン2人（0.08%）、ヘロイン1人(0.04%)、薬物名不明7人（0.3%）であった。

（8）回答者自らが過去に薬物乱用に誘われた経験の有無と誘った人は誰か

質問は、「最近1年間に誘われた」「1年以上前に誘われた」に分けた。誘った人は乱用者との想定のもとに質問をした。

1) シンナー等有機溶剤

a. 誘われた経験（表36）

「シンナー等有機溶剤の使用を誘われた経験がある」と回答した人は37人（1.5%）であった。最近1年間に誘われた人は3人（0.1%）であった。

b. 誘った人は誰か（複数回答）（表37）

該当者37人中、「学校の友人・知人」25人（67.6%）、「その他の友人・知人」10人（27.0%）、「密売人」1人（2.7%）、「見知らぬ人」2人（5.4%）であり、有機溶剤乱用には、学校の友人・知人、その他の友人・知人の影響が強いことを示唆している。

2)覚せい剤

a.誘われた経験（表36）

「覚せい剤の使用を誘われた経験」があると回答した人は8人（0.3%）であった。
最近1年間に誘われた人は1人（0.04%）であった。

b.誘った人は誰か（複数回答）（表37）

該当者8人中、「学校の友人」1人（12.6%）、「その他の友人」5人（62.5%）、「密売人」1人（12.5%）、「見知らぬ人」2人（25.0%）で、多くは学校外の友人・知人から誘われ、仲間の影響が大きいことを示唆している。

3)大麻

a.誘われた経験（表36）

「大麻の使用を誘われた」経験があると答えた人は28人（1.2%）であり、「最近1年間に誘われた人」は3人（0.1%）であった。
覚せい剤に比較して大麻に誘われた人が多いの特徴であり、この傾向は過去2年間の調査結果と類似していた。

該当者28人中、海外の旅行、滞在経験のある人は19人（67.9%）であって、海外での生活の影響が大きいことを示唆している。高校卒、大学卒の高学歴者が多く、覚せい剤、有機溶剤とは異なる階層に属していた。

b.誘った人は誰か（複数回答）（表37）

該当者28人中、「学校の友人・知人」4人（14.3%）、「その他の友人・知人」15人（53.6%）、「密売人」2人（7.1%）、「見知らぬ人」5人（17.9%）、「その他」3人（10.7%）であった。友人・知人の影響の大きいことを示している。

4)コカイン

a.誘われた経験（表36）

「コカインの使用を誘われた」経験があると回答した人はいなかった。

5)ヘロイン

a.誘われた経験（表36）

「ヘロインの使用を誘われた」経験があると回答した人は1人（0.04%）であった。
ヘロインなどオピエート系麻薬の乱用が殆どないことを示唆する結果である。

b.誘った人は誰か（複数回答）（表37）

誘った人は「その他の友人・知人」1人（100.0%）であった。

表36 あなたご自身、これまでに以下薬物の使用を誘われたことがありますか（%）

対象薬物	ない	最近1年間にある	1年以上前にある	なんとも言えない	無回答	誘われた（計）
有機溶剤 (100.0)	2322 (96.1)	3 (0.1)	34 (1.4)	19 (0.8)	37 (1.5)	37 (1.5)
覚せい剤 (100.0)	2335 (96.7)	1 (0.04)	7 (0.3)	7 (0.3)	65 (2.7)	8 (0.3)
大麻 (100.0)	2331 (96.5)	3 (0.1)	25 (1.0)	4 (0.2)	52 (2.2)	28 (1.2)
コカイン (100.0)	2360 (97.7)	— —	— —	3 (0.1)	52 (2.2)	— —
ヘロイン (100.0)	2376 (98.4)	— —	1 (0.04)	2 (0.1)	36 (1.5)	1 (0.04)

表37 薬物乱用を誘った人は誰か（複数回答）（%）

薬物名	該当数 (%)	学校の友人知人	その他の友人知人	恋　人 (愛人)	密売人	見知らぬ人	その他
シンナー等有機溶剤	37 (100)	25 (67.6)	10 (27.0)	1 (2.7)	1 (2.7)	2 (5.4)	1 (2.7)
覚せい剤	8 (100)	1 (12.5)	5 (62.5)	－ －	1 (12.5)	2 (25.0)	－ －
大　麻	28 (100)	4 (14.3)	15 (53.6)	－ －	2 (7.1)	5 (17.9)	3 (10.7)
コカイン	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
ヘロイン	1 (100)	－ －	1 (100)	－ －	－ －	－ －	－ －

（９）過去・現在に違法薬物乱用の経験の有無

シンナー等有機溶剤、覚せい剤、大麻、コカイン、ヘロインなど違法薬物の乱用を「最近1年間」、「1年以上前の過去」に経験したかについて質問した。

1)「シンナー遊び」の経験の有無（表38）

「シンナー遊び」を経験したと回答した人は41人（1.7%）で、そのうち「最近1年間に経験した」と回答した2人（0.1%）は、いずれも20歳未満であった。

「過去に経験した」と回答した人は39人（1.6%）で、20歳代、30歳代が多かった。

41人中、男性32人（78.0%）、女性9人（22.0%）で、男性が多かった。

2)覚せい剤の使用経験の有無（表38）

覚せい剤を経験したと回答した人は7人（0.3%）で、そのうち「最近1年間に経験した」と回答した人は1人（0.04%）で、20歳代であった。「過去に経験した」と答えた人は6人（0.2%）であり、いずれも30歳以上の人であった。

7人中、男性6人（85.7%）、女性1人（14.3%）であり、男性が多かった。

3)大麻の使用経験の有無（表38）

大麻を経験したと回答した人は13人（0.5%）であった。そのうち「最近1年間に経験した」と回答した人は3人（0.1%）で、10歳代、20歳代、40歳代の各1人であった。「過去に経験した」と答えた人は10人（0.4%）で、20歳代3人、30歳代4人、40歳代3人で、年齢層が広いことが特徴であった。

13人中、男性12人（92.3%）、女性1人（7.7%）で、男性が多かった。高校卒業以上の学歴を持つ人が多かった。海外での生活を経験した人は7人であり、海外での生活経験と関係が高いことを示唆している。

「薬物乱用に誘われた経験の有無」の質問と同様に、大麻が覚せい剤を上回っていたことが特徴であった。過去2回の調査でも同様であった。大麻がダーテイなイメージが少ないので回答し易いことと、予想以上に大麻の潜在的な乱用者が多いことが考えられる。

4)コカインの使用経験の有無（表38）

コカインを「過去に経験した」と回答した人は1人（0.04%）のみで20歳代の男性であった。

表38 薬物乱用を過去、現在に経験した人（率）

薬物名	一度も経験ない	最近1年間にしたことあり	過去に経験にした	無回答	経験した（小計）
シンナー等有機溶剤	2331 (96.5)	2 (0.1)	39 (1.6)	43 (1.8)	41 (1.7)
覚せい剤	2356 (97.6)	1 (0.04)	6 (0.2)	52 (2.2)	7 (0.3)
大　麻	2360 (97.7)	3 (0.1)	10 (0.4)	42 (1.7)	13 (0.5)
コカイン	2373 (98.3)	— —	1 (0.04)	41 (1.7)	1 (0.04)
ヘロイン	2371 (98.2)	— —	— —	44 (1.8)	— —

過去2回の調査でも同様の結果であり、コカインが言われているほどには社会に浸透していないのか、乱用者が少ないのかはまだ不明である。

5) ヘロインの使用経験の有無（表38）

ヘロインの使用経験者はいなかった。

ヘロインや、オピエート系麻薬の乱用がわが国では殆どないことを示唆する結果であろう。

D．考察

今年度は、東京圏、大阪圏、九州圏の住民3,300人を対象に「薬物乱用・依存の世帯調査」を施行した。調査結果については昨年度に実施した同規模の東京圏、大阪圏の調査結果[3]と比較しながら考察をした。

1．薬物乱用・依存の世帯調査について

わが国の薬物乱用・依存は、社会の変化、外国の影響を受けて刻々と変化している。

これまでは、わが国の薬物乱用の実態の把握の疫学的指標として警察庁[5]、厚生省[6]による薬物事犯検挙者の統計と福井らの精神科医療施設の実態調査[4]が主に使われてきた。

しかし、薬物乱用・依存の傾向及び実態を明らかにするためには、学校、職場、一般市民など薬物乱用に関係する施設、住民などの多面的な疫学的調査が大切である。

特に、一般市民を対象とした「世帯調査」の実施が長年望まれてきた。

薬物乱用が大きな社会問題になっている米国では国立薬物乱用研究所 National Institute of Drug Abuse(NIDA)により1972年から11歳以上の一般住民を対象とした薬物乱用・依存に関する世帯調査（National Household Survey）が施行されており、当初は3,000人から始まり、現在は32,000人、予算は13,000万ドルで国家規模の調査が2年に1回行われている。米国の薬物乱用・依存対策を考える上の基礎資料となっている。

幸いに、平成4年度厚生科学研究費補助金麻薬等対策総合研究事業の一つとして「薬物乱用・依存の世帯調査」の実施の機会を得た。その後も調査内容、調査方法などを研究しながら、東京圏・大阪圏へと調査地域を拡大し、

さらに今年度は九州圏を加えて調査を実施した。今後の本格的な全国調査に備えたい。

（1）平成4年度の市川市の調査より[2]

平成4年度は、千葉県市川市の15歳以上の男女1,100人を対象に「薬物依存の世帯調査」を実施し、調査内容、調査方法についての研究を行った。予備調査として100人を対象に、訪問留置法と直接面接法の二通りを行い、調査内容の是非、調査結果、調査員の印象等について、分担研究者、調査会社、調査員らが検討した結果、この種の調査では訪問留置法が適しているとの結論を得て、本調査では訪問留置法を採用した。その結果、73.8％の高い回答率を得た。

（2）平成5年度の東京・大阪圏の調査より[3]

市川市の調査を参考にして訪問留置法を用いて、平成5年度は調査地域をさらに拡大して、東京圏（旧都庁を中心に50km圏）、大阪圏（大阪駅を中心に40km圏）の各住民1,500人、計3,000人を対象に調査は行われた。有効回収率は70.8％であり、前年度の調査に比べてやや低いが、この種の調査では高い回収率であったと考える。

住民の生活のあり方、喫煙・飲酒状況、薬物乱用に関する意識、睡眠薬など合法的な薬物の使用状況、周囲の薬物乱用者の周知状況などは、前年度の市川市の調査結果と非常に類似しており、傾向は同じであることを知り、調査対象者がこの調査に真面目に応じてくれたものと考える。

違法薬物の中で潜在的な大麻乱用者が予想以上に多いという結果は同様に得られたが、現在の違法薬物の乱用者については、2回の調査で把握出来なかった。現在の違法薬物乱用者の発生率をいかに捉えるかが今後の課題として残された。しかし、わが国においても「薬物乱用・依存の世帯調査」の実施が可能であることを知った。

（3）今年度の調査より

今年度は、過去2回の調査研究を参考にして、東京圏（旧都庁を中心に50km圏）、大阪圏（大阪駅を中心に40km圏）、九州圏（福岡市の20km圏と北九州圏市の20km圏）の無作為に抽出した15歳以上の男女各1,100人、計3,300人を対象に、薬物乱用・依存に関する世帯調査を訪問留置法にて行なった。

東京圏は横浜、鎌倉、八王子、大宮、千葉の各市が圏内に、大阪圏は京都、神戸市が圏内に、九州圏は福岡市、北九州市の全域とその周辺の市町村が圏内に入る。

過去2回の調査では、調査内容については概ね満足出来る結果を得たが、この調査の主目的である「違法薬物の現在の使用者」の発生率については回答を得ることが出来ず、現在の違法薬物の乱用者を明らかにすることが今年度の課題であった。

調査対象者が家族の中の指定した一人であることを確認するために回収用の封筒に氏名を記していたが、今年度はそれを廃止して、依頼用紙にのみ氏名を記入することにした。また、違法薬物の乱用経験の有無に関する質問において、過去2回の調査では「一度も経験なし」、「過去に数回経験あり」、「過去に何回も経験あり」、「最近1年間に何回も経験あり」の4段階から、「一度も経験なし」、「最近1年間に経験あり」、「過去に経験した」の3段階にし、「何回も」を消去し、回答者に回答し易いように変更を試みて、調査に臨んだ。

調査内容は、日常生活のあり方、喫煙・飲酒など嗜好品の使用状況、家庭に用意してある常備薬、睡眠薬・抗不安薬など依存性を有する医療用薬物の使用状況、海外生活と薬物乱用の関係、薬物乱用に関する意識、周囲で違法薬物の使用している人の周知度、違法薬物に誘われた経験の有無、違法薬物の使用経験など多岐にわたっていた。

回答率は73.2％であり、市川市の調査に次いで高率であった。いずれの調査でも回答率は70％を越えており、この調査方法、調査内容で本格的な全国調査が可能であることが判明した。

この調査により、住民が自らの日常生活をいかに捉えているか、喫煙者の64％が禁煙を望んでいること、医療で睡眠薬・抗不安薬など依存性を有する医療薬物の使用率など興味ある事実が判明した。

違法薬物についても、住民の周囲に存在する乱用者の周知状況、住民自らが乱用に誘われた経験と自らの乱用経験の有無などの結果

を総合的に検討することにより、現在の乱用者の発生率と実態を把握出来たことは大きな収穫であった。その中で、大麻が覚せい剤と同じくらいか、もしくはそれ以上に社会で乱用されていることを知った。市民の大麻に対する認識の甘さ、海外での大麻の乱用の影響を受けて、近い将来、大麻乱用がわが国の社会で流行する可能性を秘めていると考える。

「薬物乱用・依存に関する世帯調査」はやっとスタートしたばかりである。今後、経年的に全国調査を実施することにより、わが国の薬物乱用の実態の把握と、それに基づく薬物乱用・依存の教育、啓発、予防そして治療対策を考える貴重な資料が出来るであろう。そして5千～6千人規模の全国調査が実施出来たならば、さらに詳細な結果を得ることが出来ると考える

以下、調査結果について考察する。

2．日常生活に関する質問について

「健康状態」の質問で、健康状態は「よくない」と回答した人は438人（18.1%）であり、男性16.6%、女性19.5%であった。
男女ともに50歳以上の人の1／3が何等かの身体的不調を感じていた。

「日常生活、活動に意欲がなくなることがある」と回答した人は748人（31.0%）であった。男女とも、10歳代、20歳代に比較的高率に認められた。

「仕事、学業、家事がうまくいかない」と回答した人は897人（37.1）%であった。
男女とも10歳代の未成年者に高率（男性56.1%、女性57.1%）であり、年齢層が高くなるにつれて低率となり、60歳以上では男性26.8%、女性28.9%であった。

意欲がない、仕事・学業・家事がうまくいかないと答えた人はいずれも若年層に多いのは、Identityの確立がまだ不十分なこと、これからの人生に不安を抱いていることがこの結果になったものと考える。

「日常生活で不安感、緊張感をもつ」と回答した人は1,029人（42.6%）と高率であった。男性は40歳代、50歳代がそれぞれ46.8%、女性は50歳代が45.5%と比較的高率に認められ、その年代の人の社会、家庭における緊張状況を反映しているものと考える。特に、この年代の人たちに後述の睡眠薬、抗不安薬の常用者が多いことからもうなずける

「不眠、途中覚醒などの不眠がある」と回答した人は827人(34.2%）であり、男性33.7%、女性34.7%と男女差はなかった。
しかし、男性は60歳以上で41.6%、女性は50歳代42.1%、60歳代49.1%と高率であった。
男女とも高齢になると何等かの睡眠障害に悩んでおり、当然、この人たちの睡眠薬常用率は高く、高年齢社会を迎えて一般健康問題を含めてその対策が必要であると考える。

「最近1年間に、頭痛があった」と回答した人は927人（38.4%）であり、男性27.4%、女性48.4%と女性が有意に高率であった。
男女とも、年齢との関係はなかったが、10歳代に若干多い傾向を認めた。

「現在の生活に満足している」と回答した人は1,963人81.3%であり、男性79.4%、女性83.0%であり、年齢による差を認めなかった。

これらの日常生活の問題は、喫煙、飲酒とは特に関係はなかった。
鎮痛薬、抗不安薬、睡眠薬の服用とは有意の関係を認めた。
有機溶剤、覚せい剤など違法薬物の使用とは特に関係は認めなかった。

3．嗜好品に関する質問

（1）喫煙

喫煙率は、32.0%（男性51.1%、女性14.8%）であった。

男性の喫煙率は30歳代66.7%と最も高く、20歳代58.8%、40歳代55.6%、50歳代54.1%、60歳代44.2%、10歳代15.8%であった。
女性は20歳代18.5%、30歳代18.4%、40歳代17.2%の順で高率であり、50歳以上は11.2～11.4%であった。10歳代が8.6%であり、昨年(3.5%）に比べて未成年女子の比率が高い。
男性は20歳代～50歳代の人に喫煙者が多く、女性は20歳代から40歳代に喫煙者が多かった。

平成6年5月に日本たばこ産業株式会社が、全国の20歳以上の16,000人を対象に喫煙の実態調査を実施しているが、それによると喫煙率36.2%（男性59.0%、女性14.8%）であり、ここ数年横ばい状態にあるという。その中で男性の喫煙率は低下、女性は上昇傾向にあるとも報告している。

それに比べると、われわれの調査の喫煙率は32.0%と低率であった。調査対象に未成年者が含まれていること（未成年者を除くと喫煙率は34.0%）と調査対象地域が主に都会が中心であったことがその差に表われたものと考える（たばこ産業の調査では北海道、東北の喫煙率は高い）。しかし、男性の喫煙率は昨年に比べて低下しており、女性は若年層に増加しているのは日本タバコ産業の調査結果と一致していた。

喫煙者774人中40.3%が「禁煙を考えたが実行していない」、23.6%が「禁煙を失敗した」と回答しており、喫煙者の約64%の人が禁煙をしたいと考えていることが明らかになった。近年、喫煙と健康、受動喫煙の問題が取りざたされている。啓発、教育のみならず、一部製薬会社から発売されたニコチンガムなどを利用した禁煙法の開発が望まれる。

禁煙者は13.8%（男性21.7%、女性6.6%）であった。男性は50歳代29.0%、60歳以上36.8%であり、50歳以上の人に多かった。女性は20歳代11.3%、30歳代12.4%の年齢層に多かった。男性は健康上の理由で、女性は育児との関係で禁煙に踏み切ったものと考える。

禁煙者を含め喫煙を経験した者1,107人の過半数以上が未成年の時期に喫煙を始めていた。男女とも未成年の喫煙者の約半数が中学在学中に喫煙を開始していた。最近の喫煙者の喫煙開始の低年齢化を示す結果である。

（2）飲酒

男性は週に2～3回以上の常習飲酒者（56.9%）が多く、殆ど毎日飲酒する人は41.5%であった。それに対し、女性は週に1～2回以下の飲酒者（50.1%）が多く、特に月に1～2回以下の機会的飲酒者が多いのが特徴であった。殆ど毎日飲酒する人は男性で30歳代で約半数、40歳代以上になると過半数以上の人が毎日飲酒していると回答していた。女性は40～50歳代に比較的多く、11～12%が毎日飲酒すると回答していた。

男女の差を認めるものの、飲酒は社会的活躍度と関係していると考える。

しかし、主にどういう機会に飲酒するかとの問に、飲酒経験をもつ男女とも30歳代以上になると男女とも61～78%が「家で食事、団らん時に飲酒する」と回答する人が多いのが特徴であった。「友人・同僚・上司のつきあいで飲む」と回答した人は男性で10歳代～30歳代（60～77%）、女性は10歳代～20歳代（64～72%）に多かった。「仕事や商売上の必要で飲む」と回答した人は男性で30～50歳代（23～27%）に比較的多く認めた。

中年者層の多くは家庭で、若年層は友人・同僚とのつきあいで飲酒する機会が多いという最近の世相を示している。

飲酒者の1,757人の過半数以上が未成年の間に経験をしていた。特に最近も若年者層は喫煙と同じく飲酒開始年齢の若年化を示していた。

（3）喫煙と飲酒の関係

喫煙と飲酒は密接な関係が認められ、喫煙者は非喫煙者より飲酒率は高く、また喫煙本数が増えると飲酒率も高くなる傾向を認めた。特に「毎日の飲酒者」にその傾向が強かった。喫煙の害を考えるときは、飲酒との関係も併せて考えた方がよいかと思う。

喫煙、飲酒の低年齢化が言われ、社会でも容認している傾向がみられるが、わが国でのニコチン、アルコールを含め依存性物質に対する学校教育のありかたを再検討する必要があると考える。

4．鎮痛薬、抗不安薬、睡眠薬の使用についての質問

（1）家庭に常備している薬と常用薬の種類

殆どの家庭で何等かの常備薬を備えていた。胃腸薬、風邪薬、湿布薬、鎮痛薬、ビタミン剤などが主な薬剤であった。

日常生活で常用薬を服用している人は35.7%であったが、年齢が高いほど高率であった。常用薬は、ビタミン剤、胃腸薬が多く（14～16%）次いで血圧の薬（7%）、風邪薬（3%）、鎮痛薬（3%）であった。胃腸薬、血圧の薬は男性に多く、ビタミン剤、鎮痛薬は女性に多い傾向を認めた。

（2）最近1年間に鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を使用した人

最近1年間に鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を使用した人について詳細に調査した。

1)最近1年間で頭痛、生理痛以外の慢性的疼痛で鎮痛薬を使用した人

「最近1年間に頭痛、生理痛以外に慢性の身体的痛みのため鎮痛薬を使用した人」は14.5%（男性13.3%、女性15.5%）であり、女性にやや高率に認められた。頭痛の場合は年齢差を認めなかったが、頭痛、生理痛以外の疼痛となると50歳以上の男女に高率（19%前後）であった。

週に数回以上の使用者（常用者）は2.2%に認めた。入手先は病院48.1%、常備薬33.8%、薬局18.9%であり、主に医療機関より入手していたが、常備薬からとするものも多く、これは鎮痛薬の特徴であろう。

2)最近1年間で精神安定薬を使用した人

「最近1年間に精神安定薬（抗不安薬）を使用した人」は4.6%（男性4.2%、女性5.0%）であり、女性にやや多い傾向を認めた。

「週に数回以上の使用者」は1.7%であり、常用者と考える。

男性は50歳以上は7%前後、女性は50歳以上は8.6～10.5%と高齢者に高率に認めた。

使用者111人の精神安定薬の入手先は病院が85.6%と殆どであった。家族（常備薬）からは6.3%、薬局からが3.6%に認めた。

精神安定薬を使用していた人は、日常生活において「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」と答えた人に有意（$p<0.0001$）に高率であった。

精神安定薬の使用者の使用理由は、不眠、不安、ストレス、高血圧など精神的・身体的疾患の改善であり、殆どが治療目的による使用であった。遊びの目的でと答えた人はいなかった。

3)最近1年間に睡眠薬を使用した人

「最近1年間で睡眠薬を使用した人」は3.9%（男性3.7%、女性4.1%）であり、女性にやや高率に認めた。

「週に数回以上の使用者（常用者）」は1.2%であった。

男性は50歳代6.1%、60歳以上8.2%、女性は50歳代6.9%、60歳以上の8.3%の高齢者に高い使用率を示していた。

睡眠薬の使用者は日常生活において「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」と答えた人に有意に高率を認めた。

睡眠薬の入手先（複数回答）は、病院81.1%、薬局3.2%、常備薬7.4%、友人・知人5.3%であった。常備薬、友人・知人の率が高いのが気になる結果である。

使用理由（複数回答）は、「不眠の治療」76.8%であり、不安、ストレスなどの精神的苦痛、高血圧その他身体疾患などの治療の目的が多かった。

鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬のいずれも女性の方が男性より使用率は高く、50歳以上の中高年者に多いことが特徴であった。鎮痛薬の使用理由は頭痛その他身体的疼痛の改善を目的としたものであり、精神安定薬、睡眠薬の使用理由は不眠、不安、ストレス、高血圧など身体的疾患の改善など医療目的によるものであった。医療の目的で、これらの薬物を使用する場合、個人的理由で使用するものであって、性差は少なく、やや女性に多い傾向であり、中高年者に多いことが特徴である[1]。

精神安定薬、睡眠薬の使用者は、日常生活で「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」と回答した人と有意な関係（$p<0.001$）を認めた。日常生活の中で健康状態、活動意欲、感情面などで不安定な人、すなわち神経症的、抑うつ的傾向の人に精神安定薬、睡眠薬の使用・常用者が多いことが推察される。

調査からは特に乱用・依存例については疑わしい人は特定出来なかった。

4)鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬の使用者、常用者の推定人口

今年度の調査地域の東京圏、大阪圏、九州圏の15歳以上の母集団は39,103,353人であった。それから換算すると、この地域での鎮痛薬の使用者は567万人、常用者は86万人と推測する。精神安定薬の使用者は180万人、常用者は67万人に、睡眠薬の使用者は153万人、常用者は47万人になると推測される。非常に多くの人が鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を使用し、常用していることになる。

同規模の調査であった1993年度の東京・大阪圏の調査結果による使用者・常用者率は、鎮痛薬の使用率13.3%（常用者率2.6%）、精神安定薬の使用率4.6%（常用者率1.9%）、睡眠薬の使用率4.4%（常用者率1.1%）であ

った。
本年度の調査結果と大きな差はなかった。
著者らの全国の医療施設の調査[7]から鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬の使用者は特に地域差を認めなかった。これらの薬物の使用は流行と関係なく、個人の性格、健康など個人的理由と密接な関係があることから地域差はないと言われている[1]。
したがって、この使用率、常用率を全国にあてはめることは可能と考える。
15歳以上の男女は全国で約1億300万人（平成4年10月1日）いることから、1993年度の結果も考慮して、鎮痛薬を1年間に使用したことのある者は1,370万～1,494万人、常用者は227～268万人、精神安定薬の1年間の使用者474万人、常用者は175～196万人、睡眠薬を1年間に使用した人402～453万人、常用者113～124万人いると推察する。非常に多くの人が依存性を有する医療用薬物を使用していると言える。
この中に医療を要する乱用・依存例がどれくらい含まれているかは同定は出来なかったが、精神科医療施設の実態調査から推察するとその数は非常に少ないと考える。

5．薬物乱用に関する意識調査

わが国で覚せい剤と有機溶剤が長年にわたり乱用されていることについては、90％前後の人が認識しており、危険な状況にあると思っている。これらの薬物乱用・依存問題は一般の人々とは関係があるが、自分とは直接関係がないと考えている人が多い。

中南米の麻薬戦争など外国での薬物乱用問題、あへん戦争のような歴史上の出来事については過半数以上の人が認識していない。

家庭内でも薬物乱用問題は語られることが少ないことが調査からわかった。

男性に比べて女性の認知度はやや劣り、男女とも未成年者、60歳以上の人に劣る傾向があった。

この傾向は、過去2回の調査結果と同じであり、今後、薬物乱用・依存についての学校教育、啓発・啓蒙運動のあり方について再検討の必要がある。

6．海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

近年、海外との交流が盛んになるにつれて海外旅行、出張、留学、駐在を経験する人が増加している。その一部の人に大麻、コカイン、ヘロインなどの違法薬物を経験する人がいると言われている。そこで海外旅行、滞在と薬物乱用の関係について質問を行なった。

海外に滞在したことのある人は、978人（40.5％）いたが、「薬物の使用の噂を聞いたことのある人」8.2％、「薬物を使用した人を知っている人」4.7％であった。その中で、海外旅行者の比率は低く、仕事で滞在、海外留学など長期滞在者に比率は高かったが、人数的には海外旅行者が多い。

薬物乱用に誘われた人は25人2.6％であった。乱用した人は大麻が1人、その他1人であった。

海外滞在中に薬物乱用に誘われたり、自ら使用する機会の多さを示唆する結果である。

7．周囲で薬物乱用をしている人の周知度

前年度は住民の周囲で薬物を乱用している人と乱用薬物名について質問したが、今年度は「最近1年以内に乱用している人を知っている」と「1年以上前に乱用した人を知っている」に回答を分けた。

「1年以内に乱用している人」を知っている人（比率）は、有機溶剤52人（2.2％）、覚せい剤8人（0.3％）、大麻4人（0.16％）、コカイン2人（0.08％）、ヘロイン1人（0.04％）、薬物名不明7人（0.3％）であった。

本年度の調査地域の東京圏、大阪圏、九州圏の15歳以上の母集団39,103,353人から、この地域の住民が認知していた最近の薬物乱用者を換算すると、有機溶剤約86万人、覚せい剤約10万人、大麻約6万人、コカイン約3万人の乱用者がいると推測する。
回答者の報告の信憑性の問題はあるが、それを差し引いても潜在的な乱用者の存在の多いことを示唆している。特に、大麻は覚せい剤に近い数字が出ており、大麻の潜在的乱用者はわれわれの予想を越えて多いことが推察出来る。

8．対象者自らが薬物乱用を誘われた経験の有無について

違法薬物の乱用者が初めて乱用する動機は、該当薬物の乱用者から誘われて始めることが多い。したがって薬物乱用に誘われた経験の有無は、疫学的に重要な意味を持っている。誘われた人の周囲には、同数かそれ以上の乱

用者がいるとの想定のもとに質問をした。

本年度の質問は、「1年以内に誘われた」「1年以上前に誘われた」に分けた。

（1）誘われた経験

「シンナー等有機溶剤の使用を誘われた経験がある」と回答した人は37人（1.5%）であり、最近1年間に誘われた人は3人（0.1%）であった。

「覚せい剤の使用を誘われた経験」があると回答した人は8人（0.3%）であった。最近1年間に誘われた人は1人（0.04%）であった。

「大麻の使用を誘われた」経験があると答えた人は28人（1.2%）であり、「最近1年間に誘われた人」は3人（0.1%）であった。

「コカインの使用を誘われた」経験があると回答した人はいなかった。

「ヘロインの使用を誘われた」経験があると回答した人は1人（0.04%）であった。

この結果から、有機溶剤、覚せい剤、大麻がわが国で乱用されている主な薬物であると言える。特に、大麻は過去2回の調査でも同様で、有機溶剤に次いで2番目に多かった。

回答者にとっては、覚せい剤は犯罪性のイメージが強く、大麻は覚せい剤よりダーティなイメージが少ないために回答し易かったことが、大麻が有機溶剤に次いで多かった理由に考えられる。しかし、大麻がわれわれの予想以上に社会に浸透しており、潜在的乱用者が実際には多いこともその理由に考えられる。

コカインは、南米諸国の密造、密売組織によるわが国への密輸入、密売が大々的に図られており、覚せい剤に代わってコカイン乱用の流行があろうと危惧されてきたが、覚せい剤ほどにはわが国のブラックマーケットで一般化されていないのではないかと考える。

ヘロインなどオピエート系麻薬の乱用は、わが国では社会的、医療的に殆ど問題になっていない結果であると考える。

なお、「過去、現在とも違法薬物乱用に誘われた経験」を有する人の比率と、後述の「過去、現在に違法薬物の使用を経験した人」の比率が殆ど一致しており、薬物乱用者の発生率を考える上で興味ある結果である。発生率については後で考察する。

（2）誘った人は誰か

誘った人は70～90%が「学校の友人・知人」、「その他の友人・知人」であり、「密売人」「見知らぬ人（乱用者）」より多く、住民の周囲には友人・知人である多数の薬物乱用者が存在していることを示唆しており、これらの友人・知人の存在が薬物乱用の初回使用の主な誘因であることがよくわかる[4,7]。

特に有機溶剤は「学校の友人・知人」の存在が乱用の大きな誘因となっている。覚せい剤、大麻は学校外の友人・知人の存在が誘因になっている[4,7]。

9．対象者自らが過去、現在に違法薬物使用の経験の有無について

過去2回の調査で、現在の違法薬物乱用者の回答を得ることが出来ず、いかにして回答を得るかが本年度の課題であった。

これまでは調査対象者を確認するために調査用紙回収用の封筒に氏名を記入していたが、それが対象者に無用の心配を与えていたと考え、本年度はそれを廃止し、依頼書のみに氏名を記入した。

また、質問内容もこれまでは「最近1年に何回も経験した」「過去に何回も経験した」「過去に数回経験した」「一度も経験なし」から、本年度は「最近1年間に使用したことがある」「過去に使用したことがある」「一度も使用したことはない」に改訂した。

なお、昨年度の3,000人を対象とした東京圏、大阪圏の世帯調査の結果などを参考にして違法薬物の発生率について考察する。

（1）有機溶剤

「シンナー遊び」を「最近1年間に経験した」と回答した人は2人（0.1%）で、いずれも20歳未満であった。「過去に経験した」と回答した人は39人（1.6%）で、20歳代、30歳代が多かった。現在、過去に乱用経験を有した人は1.7%であった。前述のごとく「有機溶剤使用に誘われた」人は「最近1年以内」が0.1%、「1年以上前」が1.4%で、比率はほぼ一致していた。1993年度の同規模の東京圏、大阪圏の調査で「有機溶剤を過去に経験した人」の比率は1.5%であり、ほぼ一致していた。

また、20歳未満の調査対象者は219人であり、調査地域の未成年者の最近1年間の有機溶剤乱

用の発生率は少なくても0.9%であった。
一方、和田が1993年度に7,166人の中学生を対象に実施した調査にて「シンナー遊び」経験者は1.2%であり、「最近1年間」の経験者は0.9%であったと報告している[8]。年齢、対象は異なるが、未成年者の最近の使用者率は、われわれの調査結果と一致している。

調査対象者2,415人のうち、有機溶剤を最近1年間に使用した人は少なくも0.1%いたと推察出来る。有機溶剤を過去に使用した人は少なくも1.6%であったと言える。

今年度に調査した東京圏、大阪圏、九州圏の総人口は39,103,353人である。有機溶剤使用者の発生率から換算すると、この地域で有機溶剤を最近1年間に使用した人は39,000人、過去に有機溶剤を使用した人は626,000人いたと考えられる。

（2）覚せい剤

覚せい剤を「最近1年間に経験した」と回答した人は1人（0.04%）であり、20歳代であった。「過去に経験した」と答えた人は6人（0.2%）であり、いずれも30歳以上の人であった。
先述の「覚せい剤の使用に誘われた経験のある人」は、「最近1年間」は1人（0.04%）、「1年以上前」は7人（0.3%）とほぼ一致していた。
昨年度の東京圏、大阪圏の世帯調査では「過去に使用した」人は0.4%であり、昨年度に比べて、今年度の調査結果は低率であった。

警察庁は、1993年の「劇物及び毒物取締法違反検挙者」は12,504人、覚せい剤取締法違反検挙者は15,252人、大麻取締法違反検挙者は1,933人と報告している[5]。
警察庁の報告から考えると、覚せい剤の「最近1年間使用」経験者が1人（0.04%）の結果は有機溶剤、大麻に比べていかにも少ない。これは、覚せい剤が有機溶剤、大麻に比べて市民の側に犯罪性の意識が強く、回答することに抵抗があり、防衛的になっている結果であると考える。

「住民の周囲で覚せい剤を乱用している人を知っているか」の質問で、「1年以内で知っている」と回答した人は8人（0.3%）、「過去に知っている」と回答した人は34人（1.4%）であった。なお、昨年度の東京・大阪圏の調査では「覚せい剤乱用者の周知度」は現在、過去を含めて1.9%であった[3]。間接的ではあるが、覚せい剤使用者の発生率を考える上で参考になるであろう。

今年度に調査した地域圏の総人口は39,103,353人である。覚せい剤使用者の周知率から換算すると、この地域で覚せい剤を最近1年間に使用した人は117,000人、過去に覚せい剤を使用した人は547,000人いることが推測出来る。警察庁の検挙者数と後述の大麻乱用者の発生率から考えると、妥当な数であると推察する。

しかし、覚せい剤乱用者の発生率は今後も調査対象人口をさらに増やして、検討していく課題である。

（3）大麻

大麻の使用を「最近1年間に経験した」と回答した人は3人（0.1%）であり、10歳代、20歳代、40歳代の各1人であった。「過去に経験した」と答えた人は10人（0.4%）であり、20歳代3人、30歳代4人、40歳代3人であり、年齢層が広いことが特徴であった。

「大麻乱用に誘われた経験のある人」は、「最近1年間」は3人（0.1%）、「過去に誘われた人」は25人（1.0%）であった。
最近1年間に「使用に誘われた人」と「使用を経験した人」の人数、比率は一致していた。

そして「周囲で大麻を使用している人を知っている」の周知度の質問で「最近1年間で知っている」と回答した人が4人（0.16%）、「過去に知っている」と回答した人は20人（0.8%）であった。使用経験者、誘われた経験者の人数、比率と近似した結果である。

以上の結果から、「最近1年間の大麻使用者」の発生率は少なくとも0.1%、「過去の大麻使用経験者」は少なくとも0.4%～1.0%いたと推察する。

さらに、現在、過去の大麻使用経験者と誘われた経験者は、大麻の方が覚せい剤を上回っていたことが特徴であった。1992年度の市川市民[2]、1993年度の東京圏、大阪圏[3]の調査でも同様の結果を得ていた。
大麻が、覚せい剤に比べてより犯罪性、ダーティなイメージが少ないので回答し易いことがこの結果になったと思う。その結果、市民の中には安易に大麻を使用する人が多いと考

える。調査結果より使用経験者は10歳代から40歳代と非常に幅広い年齢層で使われていた。厚生省の「平成5年度における麻薬・覚せい剤行政の概況」で、ここ5年間1,500～1,600人前後で推移してきた大麻取締法違反検挙者が、1993年は2,055人に急増したことを報告している[6]。われわれは、これまでの調査結果から潜在的大麻乱用者は予想以上に多いと考える。

今年度に調査した東京圏、大阪圏、九州圏の母集団は39,103,353人である。先の大麻使用者の発生率から換算すると、この地域で大麻を最近1年間に使用した人は39,000人、過去に大麻を使用した人は156,000人～390,000人いることになる。この数字は決して多くなく、妥当な数字であると考える。

市民の大麻に対する認識を考えると、近い将来、わが国の社会で大麻乱用が流行する可能性を秘めていると推察する。

（4）コカイン

コカインを経験したと回答した人は、「過去に経験した」と回答した人は1人（0.04%）のみで、20歳代の男性であった。

「コカインの使用に誘われた」と回答した人はいなかった。

昨年度の東京圏、大阪圏の調査[3]でも「過去に経験した人」は1人（0.04%）と同じ結果であった。

コカインは、南米諸国の密造、密売組織によりわが国へ大々的に密輸入されていると言われており、事実、警察など取締機関による押収量は増加している[5]。密売により覚せい剤に代わって乱用の流行があろうと危惧されてきたが、調査結果の低率は意外であった。

われわれの精神科医療施設の実態調査においても非常に低率であった。

しかし、「住民の周囲でコカインを乱用している人を知っているか」との質問で6人(0.2%）が知っていると回答していた。わが国のブラックマーケットにコカインが入り込んでいることは確かであるが、覚せい剤ほどにはまだ一般化されていないと調査結果より考える。しかし、今後も厳重な取締、警戒が必がある。

（5）ヘロイン

今年度の調査で、ヘロインの使用者は現在、過去ともに認めなかった。

「過去に誘われた経験がある」と回答した人は1人（0.04%）

昨年の東京・大阪圏の調査でもヘロイン経験者は同様に認めなかった。

ヘロインなどオピエート系麻薬の乱用は、わが国では社会的、医療的に殆ど問題になっていない結果であると考える。

先進諸国の中で麻薬対策に成功している唯一の国と評価されているが[4]、最近の一部の不良外国人による密輸が問題になっており、今後とも厳重な警戒が必要である。

E．結論

東京圏（旧都庁を中心に50km）、大阪圏（大阪駅を中心に40km）、九州圏（福岡市の20km圏と北九州市の20km圏）の住民を層化2段無作為抽出法で抽出した満15歳以上の男女3,300人を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存の世帯調査」を実施した。調査期間は平成6年10月3日から10月31日であった。

1．有効回答数（率）は2,415（73.2%）であった。

2．「日常生活で不安感、緊張感を持っている」と回答した人は、男性は40歳代、50歳代が46.8%、女性は50歳代が45.5%と高率であった。

「不眠、途中覚醒がある」と回答した人は、男性は60歳以上で41.6%、女性は50歳代で42.1%、60歳以上で49.1%あった。この人たちに抗不安薬、睡眠薬の常用率は有意に高かった。

3．喫煙率は32.0%（男性51.1%、女性14.80%）であった。喫煙者の64%が禁煙を望んでいた。若年者の喫煙開始時期は低年齢化の傾向を認めた。

4．アルコールを飲むという人は71.6%（男性83.0%、女性61.2%）で、殆ど毎日飲むと回答した人は24.1%（男性41.5%、女性8.3%）であり、40歳以上の年代に多かった。男女とも中高年者は家庭で、若年者は友人・仲間と飲酒する機会が多い傾向を認めた。

5．日常生活で何等かの常用薬を使用している人は35.7%であり、50歳以上でより高率であった。

6．鎮痛薬を「週に数回以上」使用している

常用者は2.2%、精神安定薬は1.7%、睡眠薬は1.2%であり、女性に多く、50歳以上の男女により高率であった。

7．海外旅行、滞在中に薬物の使用を誘われた人は、旅行・滞在者の2.6%であり、海外での薬物乱用の誘惑の機会が多い。

8．生活の周囲で薬物乱用者を知っていると回答した人（1年以内で知っている人）は、有機溶剤8.6（2.2）%、覚せい剤1.7（0.3）%、大麻1.0（0.16）%、コカイン0.2（0.08）%、ヘロイン0.2（0.04）%であった。

9．これまでに薬物乱用に誘われた経験をもつ人（1年以内に誘われた人）は、有機溶剤1.5（0.1）%、覚せい剤0.3（0.04）%、大麻1.2（0.1）%、ヘロイン0.04%であった。

10．薬物乱用を経験した人（1年以内に経験した人）は、有機溶剤1.7（0.1）%、覚せい剤0.3（0.04）%、大麻0.5（0.1）%、コカイン0.04%であった。

11．大麻の社会における潜在的乱用者は考えられている以上に多いことが判明した。

F．参考文献

1. Bejert N:Social Medical classification of addiction. Int J Addict4:3.1969.
2. 福井進、和田清、伊豫雅臣：薬物依存の世態調査、平成4年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成4年度研究報告書、p9-23、1993.
3. 福井進、和田清、伊豫雅臣：薬物依存の世態調査、平成5年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成5年度研究報告書、p5-26、1994.
4. 福井進:わが国の薬物依存の現状、薬物依存（佐藤光源、福井進編集）p49-59、世界保健通信社、大阪、1993.
5. 警察庁生活安全局薬物対策課:平成5年中における覚せい剤等薬物事犯の統計資料. 1994.
6. 厚生省薬務局:平成5年における、麻薬・覚せい剤行政の概況. 1994.
7. 清水順三郎、福井進:全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査、平成5年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成5年度研究報告書、p79-104、1994.
8. 和田清:中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究、平成4年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成4年度研究報告書、p25-63、1993.
9. 和田清:中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究、平成5年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成5年度研究報告書、p27-54、1994.

質 問 内 容

問1．ア）あなたの健康状態はいかがですか。

問1．イ）あなたは、日常の生活、活動に意欲がなくなることがありますか。

問1．ウ）あなたは、毎日している仕事（家事・勉強）でうまくいかないことがありますか。

問1．エ）あなたは、日常の生活で不安を感じたり、緊張したことがありますか。

問1．オ）あなたは、寝つけなかったり、朝早く目がさめて眠れないことがありますか。

問1．カ）あなたは、現在の生活に満足していますか。

問2．あなたは、現在たばこをお吸いになりますか。

問2－補問1．これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありますか。

問2－補問2．あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか。

問3．アルコール（酒、ビール、ウイスキー等）はお飲みになりますか。

問3－補問1．最近は主にどういう機会に飲むことが多いですか。（M．A．）

問3－補問2．あなたが、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか。

問4．次の薬のうち、あなたのご家庭にいつも用意しているものすべてに○をつけてください。（M．A．）

問5．次の薬のうち、あなたが常用している薬がありますか。（M．A．）

問6．あなたは、最近1年間に、しばしば頭が痛くなったことがありますか。

問6－補問1．その際、どのように対処しましたか。（M．A．）

問7．あなたは、最近1年間に、頭痛、生理痛以外の慢性の身体的痛みで鎮痛薬を使用したことがありますか。

問7－補問1．鎮痛薬はどこから入手しましたか。（M．A．）

問7－補問2．服用後に次のようなことを経験したことがありますか。（M．A．）

問8．あなたは、最近1年間に精神安定薬（抗不安薬）を使用したことがありますか。

問8－補問1．精神安定薬（抗不安薬）はどこから入手しましたか。（M．A．）

問8－補問2．使用理由を教えて下さい。（M．A．）

問8－補問3．服用後に次のようなことを経験したことがありますか。（M．A．）

問9．あなたは、精神安定薬（抗不安薬）についてどうお考えですか。（M．A．）

問10．あなたは、最近1年間に睡眠薬を使用したことがありますか。

問10－補問1．睡眠薬はどこから入手しましたか。（M．A．）

問10－補問2．使用理由を教えて下さい。（M．A．）

問10－補問3．服用後に次のようなことを経験したことがありますか。（M．A．）

問11．あなたは、睡眠薬についてどうお考えですか。（M．A．）

問12．薬物乱用という言葉を知っていますか。

問13．次の乱用薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつけてください。（M．A．）

問14．乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか。

問15．日本における薬物乱用の問題はどのような状況にあると考えますか。

問16．あなたは「あへん戦争」について知っていますか。

問17．米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか。

問１８．覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々にも関係のある問題だと思いますか。

問１９．「自分にも、薬物乱用への誘惑の手が伸びてくることがある」と思いますか。

問２０．「シンナー遊び」が一部の未成年者の間で流行していることを知っていますか。

問２１．覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていますか。

問２２．家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがありますか。

問２３．あなたは、海外旅行、海外出張、海外留学をしたことがありますか。
（M．A．）

問２３－補問１．海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしましたか。

問２３－補問２．海外滞在中に、あなたは薬物使用を誘われたことがありますか。

問２３－補問３．海外滞在中にあなたが使用された薬物があれば教えて下さい。
（M．A．）

問２４．あなたの周囲で、薬物を乱用している（乱用していた）人を知っていますか。

問２４－補問１．その人が使用している（乱用していた）薬物は何ですか。
（M．A．）

問２５．あなたご自身、これまでにシンナー等有機溶剤の使用を誘われたことがありますか。

問２５－補問１．誘った人はだれですか。（M．A．）

問２６．あなたご自身、これまでに覚せい剤の使用を誘われたことがありますか。

問２６－補問１．誘った人はだれですか。（M．A．）

問２７．あなたご自身、これまでに大麻（マリファナ）の使用を誘われたことがありますか。

問２７－補問１．誘った人はだれですか。（M．A．）

問２８．あなたご自身、これまでにコカインの使用を誘われたことがありますか。

問２８－補問１．誘った人はだれですか。（M．A．）

問２９．あなたご自身、これまでにヘロイン等麻薬の使用を誘われたことがありますか。

問２９－補問１．誘った人はだれですか。（M．A．）

問３０．あなたは、これまでに「シンナー遊び」を経験したことがありますか。

問３１．あなたは、これまでに「覚せい剤」を使用したことがありますか。

問３２．あなたは、これまでに「大麻（マリファナ）」を使用したことがありますか。

問３３．あなたは、これまでに「コカイン」を使用したことがありますか。

問３４．あなたは、これまでに「ヘロイン」を使用したことがありますか。

問３５．性　別

問３６．年齢別

問３７．最後に出られた学校は次のどれにあたりますか。

問３８．あなたは、結婚されていますか。配偶者の方はご健在ですか。

問３９．就業状況

問３９－補問１．どのようなお仕事ですか。

※　〔性・年齢別〕

※　〔地　域〕